

大正期における「英雄論」と三宅雪嶺

見城悌治

はじめに

思想界に於ける天才の出現と共に、必らず我々のうちから、実行界の天才が出なければならぬ。日本民族の生きる為に、新しき偉大なる時代を建設すべき偉大なる天才は、今どこに居るのだ。王政維新を作った南州と甲東と海舟と松陰を出した日本だ。もう一度これ等実行界の英雄が、躍り出してきて、行き詰った日本の現状を打開するの日は来なければならぬ。(略) 天才出でよ！英雄出でよ！かゝる声々の日本六十余州に響き渡る日が、日本に新しき膨張時代を呼び戻す日だ。その英雄待望の心を呼び起さんために、私は茲に古今の英雄の伝記を綴って江湖に送る。

この熱い叫びは、一九二八年に発行された鶴見祐輔『英雄待望論』の一節である(八・一〇頁)。政治家・鶴見はこの書で「収縮の時代」であった(と彼が見る)大正期を、再び「膨張時代」に転じさせるため、ビスマルク・豊臣秀吉・ナポレオン・西郷隆盛・吉田松陰などを思い起こすことが、「実行界の英雄」を生み出す事につながると主張するのだが、この書物は内政外交の緊張が高まるこの時代において、五十万部を超えるベストセ

ラーになったと言われる⁽¹⁾。

一方、その五年後の一九三三年、言論界に隠然たる力を持っていた徳富蘇峰も、「非常時に際して英雄を憶ふ」という論稿を発表し、⁽²⁾「歴史を唯物化したる結果は、理想の力を殆んど忘却するに至った。歴史を自然法化したる結果は、全く英雄の指導力を閑却するに至った。けれ共机上の空想を離れて、現実の人事を考察すれば、如何なる場合でも、大なる運動には、大なる理想と、大なる人物とが必須であることが判る」と述べ、歴史を作り出す主体としての「英雄」を顧みる必要性を唱えていた。

「英雄」を待望するという近代日本の言説分析は、ここに見る如く「膨張時代」あるいは「非常時」の産物たる⁽³⁾ことが自明とされるためか、思想史研究においてあまり論じられることがなかった。たとえば「英雄論」の変遷を、明治期を頂点にして徐々に衰退していったものとして捉える坂本多加雄の論考は、「立身出世論」と関わらせつつ、「健全な英雄論」は明治に終わったという捉え方を示しているとも読める。しかし、近代日本（あるいは現代日本）の問題は、「健全な明治」を主張して事足りるものでない。〈われわれ〉に埋めこめられている歴史意識の生成を遡れば、明治末以降の社会・思想の変化も当然ながら織り込まれているはずである。よって、たとえば「英雄論」「人物論」の語られ方やそこに投影される理想像を、時代に即してその思想を読み解き、考察していくことは重要な課題となるであろう。

この間、筆者は、近代日本がどのような「偉人／英雄」像を造型し、それをどのように語ってきたのか、またそれが受け手とどのような緊張感をはらむものであったのかを、たとえば大原幽学や佐倉惣五郎の表象を通じて考察してきた。⁽⁴⁾一方で、大正期の地方新聞が青年層に「英雄主義」を鼓吹し、それが当該期の「修養」思想とも

リンクし、地域社会の改革につながろうとしていたと指摘する新しい論考⁽⁵⁾も出てきているが、それほど多くの関心を集めている研究領域とは言えない。

明治後期から大正期にかけて、「英雄論」の如き論説を多数発表してきた人物に三宅雪嶺がいる。しかし、その研究の多くは、「国粹主義」思想の鼓吹者としての雪嶺に焦点を当てたものがほとんどであり、対象時期も明治中期に限定されることが多かった⁽⁶⁾。しかし近年、長妻三佐雄が、「個」と「公共性」をキーワードに、大正期に至る比較的長いスパンの中で、「個」や「職分」の概念を時代状況と絡め、積極的に捉えようとした思想家として雪嶺を評価する成果を挙げている。また長妻は本稿で論じようとする「英雄論／偉人論」についても、「三宅雪嶺の英雄論」と題する論考をまとめている⁽⁷⁾。後者は、副題が「西郷隆盛と『革命家』のエートス」とされ、西郷評価から雪嶺の歴史意識等を抽出しようとするもので、大正期における雪嶺の役割を積極的に評価しようとする長妻の論説には、首肯する部分が多い。しかしながら、筆者との課題設定の違いであろうが、西郷以外の人物論を踏まえて、雪嶺の「英雄論」を再構成する志向性はないこと、またその「英雄論」がはらむ問題点への言及はされていないこと等、不満も少なくない。

本稿は、明治中期から大正期にかけての、三宅雪嶺の「英雄論」を分析するとともに、雪嶺の論説発表の場であり、自身が編集の中心にいた雑誌『日本人』（二九〇八年からは『日本及日本人』）誌上における「英雄論」についても併せて検討を加える。それらの作業によって、大正期の思想空間、言論空間において、「英雄」という形で論ぜられた人物表象の意味とそこに雪嶺が果たした役割について、考察して行くことを課題とする⁽⁸⁾。

一、近代日本の「英雄論」の諸相

(1) アカデミズム内外の「英雄論」とその変遷

帝国大学が「史学科」とは別枠で「国史科」を新設したのは、帝国憲法が發布された一八八九年六月の事であった。ナショナリズム養成を重要な課題としていた同科の教員に就いた重野安繹・久米邦武・星野恒は、史学科教授リースから学んだランケ流の「実証史学」に基づく論文を続々発表し、後に「抹殺博士」の異名を与えられるような学風を当初つくつていった。⁽⁹⁾ 彼らの筆鋒は、「英雄」とされていた歴史上の人物に対しても容赦なかった。

たとえば、久米邦武が一八九〇年に発表した「英雄は公衆の奴隸」⁽¹⁰⁾は、「信長等の大英雄の事業も、公衆の主意に合わなければ、たちまち失敗する。英雄自体が時代を創造するわけではない。英雄も時代の子である」という趣旨を展開した。また同年に帝大史学科を卒業したばかりの白鳥庫吉も、「社会を進歩せしむる原因ありて、而して後に人傑あるなり。人傑の人傑たる所以は、此等社会力に宿を貸したるに在て、敢て人傑に人傑たるべき、固有靈妙の天才あるにあらず」と断言した。⁽¹¹⁾

こうした国史科初期の学風は、直ちに国家の求める歴史観との齟齬を来しはじめ、久米は「神道は祭天の古俗」論文執筆により一八九二年辞職に追い込まれる。さらに『大日本編年史』編纂中止を主たる理由とし、重野安繹も免官されていくなど、その後は「実証主義」の名の下に、没政治的のよう⁽¹²⁾で、その実きわめて政治的な学問が展開していくことは周知の通りである。

たとえば、後に国史科の重鎮となっていく三上参次は、帝国大学大学院を卒業したばかりの一八九一年、初め

ての著作となる『白河樂翁と徳川時代』を上梓しているが、その序文中で、松平定信の伝記を書こうと思いたった意図をおおむね次のように語っている。

私は日本歴史の中より人物も事業もともに秀でて、日本人の模範の一として景慕すべく、また歴史の一時期を代表させるに足る偉人を選び、その伝記を綴ろうと思う。その目的は二つある。一つは、偉人の伝記を語り口を中心とし、その時代の社会の様々なありさまをこれに絡めて記し、歴史に一の新体を創りだそうとするため。二つ目は、真の日本人が養成されることを望むためである。

新進気鋭の三上がここで強調したのは、新しい歴史叙述のスタイルを拓くという意図のほか、「真の日本人養成」という道徳教育的側面であった事に注目したい。三上は翌一八九二年には、国史科助教授に就くが、彼の論説は、アカデミズムにおける人物論への視座がドラスティックに変わったことを端的に物語ることになる。

それでは、アカデミズムと距離を置いた在野の歴史家たちの「英雄論」はどのようなものだったか。一八八〇年代に「平民主義」を主張し、時代の寵児となった若き日の徳富蘇峰の議論をまず見ておこう。彼は一八九三年に「無名の英雄¹³⁾」と題する評論を書いているが、その中で「一個の人物は偉大なりと雖、以て英雄となすに足らず。(略)即ち知る可きのみ。彼の表面の英雄を運動せしむるものは、即ち社会の裏面に隠れたる農夫、職工、労役者、商人、兵卒、小学教師、老翁、寡婦、孤児等数限りもなき無名英雄なることを。(略)世若し英雄を愛する人あらば、此無名の英雄を愛せよ。」との熱弁をふるった。社会的弱者をも「無名の英雄」として愛せよという主張は、「平民主義者」蘇峰の面目躍如と言える。しかし、彼が日清開戦後には「大日本膨脹論」をものするなど、国家主義的思考へ傾いていくのは、周知であり、その延長線上に、「はじめに」で見た「英雄の指導

力」を強く求める満州事変後の蘇峰がいることは、改めて確認しておきたい。

さて、日露戦後の一九一一年には、「日本」新聞の記者として名を高からしめていた福本日南の『英雄論』が発表された。福本は同書で、豊臣秀吉、乃木希典、西郷南州、光武帝、始皇帝、アレキサンダー王、ナポレオンなどを取り上げているが、その概括的評価は、「人間社会に尚ぶ所のものは、綿々として絶えざる優化遷善に在り。一言以て之を蔽へば、其の不息の進歩に在り。(略)然れども凡衆の(略)其智の浅薄なる、其力の微弱なる、之を求むる所以を知らず。是に於いて乎、英雄の提撕に待てり(二〇五頁)」というものであった。つまり浅薄・微弱な凡衆には到底解決できないような問題を、「進歩」という観点から克服する／できるのが「英雄」だとする。つまり「英雄」を非日常的な力を有する存在として捉えようとする点に特色があった(蘇峰が後に鼓吹する議論とも重なるであろう)。

明治中期から昭和戦前期にかけての人物論(英雄論)展開において、「英雄」を「抹殺」しようとする論説、「平民主義」的に捉え直す論説、「英雄」の非凡さを説く論説などが存在してきた事を一瞥してきた。それらを念頭に置きつつ、明治後期から大正期にかけての三宅雪嶺の議論を見ていくこととする。

(2) 三宅雪嶺の「英雄論」とその特色

在野史学の雄とされる雪嶺はどのような「英雄論」を展開していくのか。まず雪嶺の代表作『真善美日本人』(一八九一年)における人物論を確認しておきたい。この著作の一節「自国の為に力を尽すは世界の為に力を尽すなり。(略)護国と博愛と奚ぞ撞着すること有らん」云々は、雪嶺の「国粹主義」が偏狭なものではなかった

ことの証左として、しばしば引用されるところであるが、この著作中で、雪嶺は人物論についてこのように述べる。日本人が欧米人に体力で劣るとも智力では勝るとも劣らないことは、豊臣秀吉・徳川家康・西郷南州・伊能忠敬・紫式部など欧米と対抗できる人物が存在することからも明らかである。したがって「日本人智力の劣下、未だ遽に証し易からざるなり。但々其島国自から桃源とし、鎖閉自から局促すること日久しきを以て、大作用を做し、大能力を示すの機あらず。其の力全世界に於て幾許大の功業事蹟を為し得べきか、彼れ未だ曾て自ら知らざるなり。(略)然れども間接に比較する所を視ば、我豈に輒く欧米人の下に出でんや」と捉えた上で、将来的には「日本人」が「世界の為に力を尽くす」ことができる可能性を示唆している。

すなわち、『真善美日本人』における雪嶺の人物論は、「日本人」なる抽象的・観念的概念を具現化するための例示という色彩が強く、取り上げる人物に「偉人」「英雄」といった類いの特殊な意味内容を込めようとする意図は薄かったように思える。その後続けて雪嶺は『王陽明』（一八九三年）、『冒頓』（一八九七年）のように中国大陸の「偉人」伝を続けて発表する。『王陽明』では、その思想に共鳴、高い評価を与え、そこに「東洋哲学」の到達点があるとした。一方で『冒頓』の評伝は、政教社が企画した「東大陸人豪伝」の一冊であり、紀元前三世紀において、漢の高祖へ対抗した匈奴の「英雄」の姿を描き出す。これらの著作内容も併せ考えるに、当該期の雪嶺は狭義の「日本人」と「英雄」とを直截には結んでいなかったことを確認しておきたい。

さて、雪嶺が「英雄論」と題する論文をはじめて発表したのは、管見の範囲では『日本人』一八九九年一月号である。

英雄とは何ぞや。之に就て人互に見を異にして、動もすれば正反対に分る。以て非常として崇する者、曰

く国家は一人を以て興り、一人を以て亡ぶ。(略)之に反して以て凡常として冷視する者(略)、其の所謂英雄なる者、亦た時勢の傀儡たるに過ぎず。(略)惟ふに人の英雄に於ける概ね此の両様に分るゝと雖も、斯の如きは独り英雄に限るに非ず。万般の事、皆な然り。(略)乃ち普通の相場に準じて估值を定むべき者をも以て英雄とすべく、常価を以て評すべからざる者も亦た英雄とすべし。世の所謂英雄なる者、概するに此の間に列せん(一、五頁)。

この議論は、「英雄論」というタイトルを掲げながらも、「万般の事」には「両様」の評価が付きものであるとし、「英雄」を常ならざる存在とは見ていない点に、最大の特色がある。このような考えは、雪嶺が後に展開する「人皆天才」(一九一五年)という論点⁽¹⁵⁾へとつながっていった。

既に己れ独得の長所を発揮し、他の直ちに模倣し得ざるを天才とせば、人心の異なる猶ほ面の如し。人皆互に容貌を異にし、能力を異にし、追窮して言へば、世に一も相同じき無く、事々物々各々唯一無二にして、唯一無二の能力は、当人に於いて独得たる者、何人も独得の能力を具ふれば、何人も天才たるを失はず。(略)世に天才の甚だ少く、平凡なるの甚だ多きは、皆な独得の才を具へざるに非ず。具ふる所の独得の才が時代に顕はるるに適せざるなり。

一九一五年と言へば、吉野作造が「民本主義論」を発表する前年であるが、「何人も独得の能力を具ふ」という主張は、確実に大正デモクラシーの波濤の一翼を担う言説となり得たであろう。ここには、十六年前に執筆した「英雄論」の主旨を「独得の才」論という形で発展させている様子が伺える。

さらに雪嶺は、一九一八年に『東西英雄一夕話』と題する単著を政教社から発刊する。しかし、ここでも驚く

ような「英雄論」、あえて正確に言い換えれば「非英雄的英雄論」を展開する事になる。

「英雄と凡人と違ふのは、程度に過ぎぬ。若し尺度で測り得れば、其の程度も大きなものではない。(二六九頁)」

「英雄を賞美するのは人物としての向上心あるを暗示する。(略) 人が悉く英雄に為らうとして為れず、為れぬのに努力するのは無駄骨たるを免れぬが、多少努力するだけ社会に於ける活動の程度を高める。三十を越えて体格が定つてから力士になつても仕方がないが、二十で力士にならうと思へばなるが良い。(略) 若し誰も彼も力士になつたとして仕方がないとすれば、力士は消滅して仕舞ふ。英雄も其辺の処である。(二七〇、二七二頁)」

先の「人皆天才」論を、より分かりやすい比喩として提示しているつもりなのだろうが、それにしても「英雄も其辺の処である」との断言には、果然としてしまふ。

このような「英雄」認識を持っていた雪嶺は、第一次世界大戦後におけるロシア革命やファシズムの台頭について、どのように見ていたのであろうか。それをレーニンおよびムッソリーニに対する人物論評から確認したい。

まずレーニンであるが、雪嶺は「最下から最上に進むの最も顕著なりし者」と位置付けた上、同様な形で権力を掌握した(と考えた)ナポレオンとの違いをこう述べる。

最下から最上へナポレオンとレーニンと百年を隔て、最下から最上に飛躍する者の相ひ対立するを奇なりとす。(略)レーニンは露国の第一位に居りながら、収入は労働者の如し。ナポレオンの前に群衆が拝礼し、万歳を叫び、レーニンの前に群衆が各々同等の友人として立つ。(略)クロムエルは最初国王たらんとし、

勢の不可なるを觀て之を斥けしとの説あり。レーニンも真意と實際行為と齟齬せるやも測り難けれど、曾て例を見ざるの態度に出で、世界の前に新活劇を演じつつあり。⁽¹⁶⁾

つまり、ナポレオンの場合は、最高権力者へと成り上がった結果、群衆を拝跪せしめる存在になってしまったのに対し、レーニンについては群衆と「同等の友人」としてのスタンスを保っている点を評価しているのだ。さらにレーニンを褒めつつも一方的な礼讃に終始するのではなく、クロムエルの先例などを挙げ、レーニンの行動が将来的には暗転する可能性をも示唆している個所などは、史論家雪嶺の炯眼を感じるところである。

次いで、ムツソリーニ評は、「左傾右傾の險惡分子」(一九二四年)と題する論文⁽¹⁷⁾から見たい。

左傾右傾の意義は時代に依りて変化し、旧運動より新運動まで多少の歳月を経、新運動に慣れざる者が驚きの眼を開かざる能はず。運動の何状になるにせよ、国民の多数が、国家に関して常識を備ふる以上、如何なる變動の捲き起こるも、一時の混乱に止まるにて、深く憂ふるに足らず。(略)欧大陸は反動に対するに反動を以てするの習はしにて、伊太利にムツソリーニが出て、西班牙にリベラ將軍が出てたりとして賀すべきか。英雄の出づるの余儀なきを弔ふべきか。若し国民の多数が政治の経験あり。政治的常識の豊かならんか、英雄の手を待たずして、自らの事の宜しきを得るに非ずや。(略)英雄の輩出はブルタルク伝記的興味を唆る所あるも、今日英雄の手を藉りるは、二十世紀の發達を無視するに同じ。

この評論が書かれた一九二四年は普通選挙法が公布される一年前で、憲政擁護の声が大いに盛り上がっていた時代である。政治経験のある多数国民に政治を委ねることが肝要なのであり、ムツソリーニ的「英雄」の手を借りる必要はない。それは「二十世紀の發達を無視」するものとまで、雪嶺は断言した。この言説が同時代の民主

化運動に棹さす方向を企図していたことは明白であろう。

つまり、大正期における雪嶺の「英雄論」の真意・眼目は、冒頭で見た徳富蘇峰や鶴見祐輔が声高に訴え求めたような「救世主としての英雄」像ではない。そもそも雪嶺は超人的な「英雄」を否定的に見る傾向を強く持っていた。それは、大衆と同等の「英雄」像の提示であり、「人皆天才」論に基づく「英雄」の大衆化あるいは解体であった。

この点、雪嶺と人脈的・思想的にごく近い立場にあった長谷川如是閑が、「偉人の典型とその発生」(一九三五年)⁽¹⁸⁾と題する論考の中で、「偉人」を英雄型・聖人型・天才型・機能型の四つに分類し、近代では機能型が主流となるので、それが発生し得るような社会的環境を整えるべき、と主張していることは、まさに雪嶺の見解と相通ずるものと理解できよう。

二、『日本及日本人』誌上における人物論の特色と三宅雪嶺

(1) 『日本及日本人』誌上における人物論

大正期の三宅雪嶺が主導的に編集に関わった雑誌『日本及日本人』⁽¹⁹⁾では、しばしば人物論が特集されていた。本章では、雪嶺自身の人物論(英雄論)を改めて検討するとともに、同誌への寄稿者たちの見解も併せ、その思想的特色を考察していくこととする。

まず、吉田松陰評価から見て行きたい。『日本及日本人』一九〇八年一〇月号は、吉田松陰没後五〇年記念出版とされ、表紙には「松陰号」と刷り込まれていた。誰が見ても、松陰を称揚するための特集と思う中、あに図

らんや、雪嶺は敢てこう論じた。「幕府を破壊して王政の興復に努むるも、後ち議の同僚と協はず、画策に次ぐに画策を以てするが如きあらば、或る点に於てマジニーと併せ視るべき無しとせず」。また、その性格が「事实に現はれし所に抛れば、衆と和して安逸を偷(ママ)むよりも、国家の爲めに身を危くするの傾向あるに非ざるか」と見た上、維新後に生を続けたとしても「不遇に終はるべき数なり」云々。明治後期に至つても、長州藩閥が政權を所与の権利のごとく支配し、その思想的正統性の淵源として松陰美化を恣意的に展開していくさ中で、雪嶺はその偶像化を牽制しようとする見識を示していたと言えよう。

次いで、雪嶺が最も好んで論じた人物の一人である西郷隆盛評価を見たい。「南州の大人物なるは、年を経て愈々明白を加へ、最近戦役の起ると共に、其の真価に鉄案の下だれる觀あり。(略)毀譽褒貶に幸あり不幸あり。板垣氏にして板垣死すとも自由死せずの語を遺して瞑せしならば、恐らく自由の神として祭られ、或は東洋のワシントンと呼ばれたるべし。南州にして生存し居れば、今の如く崇拜せられざるべし、との説は強ち理なきに非ず。(略)我が日本に世界の大人物に匹敵すべき者、秀吉の如き、家康の如きあるが、南州の如き、多く類を見ず。ガリバルヂーに似てガリバルヂーより大なり。明治の世に斯かる人物の出でたるは、吾人の以て光榮とすべき所ならずや。」

これは、一九〇六年六月号に掲載された「南州墓前の祭典」という論考だが、西郷の存在を「光榮」とする一方で、死期が絶妙であつたと指摘する個所などは、前章で確認した雪嶺一流の人物評に他ならなかつた。ここからは、雪嶺が西郷を徒に聖化せんとするものではなかつたことも確認できるであろう。ここで西郷と比肩されているガリバルヂーとは、イタリアを統一した「英雄」であるが、雪嶺は、西郷没後三十三周年を記念して出版さ

れた「西郷南州特集号」(一九一〇年九月号)に、「西郷隆盛とガリバルディー」と題する論稿を掲載し、こうした自説を繰り返して論じていく。

この特集号は、雪嶺の論考を含め、三十五本のきわめて多様な西郷評価が混在・併存せしめられていた事に特色がある。以下に代表的なものを紹介しておこう。

第一は、待望される「英雄」としての評価であり、杉浦重剛の議論がその代表である。「あの維新前後豪傑雲の如く起った間に立って、単に力量丈の比較に於いても南州と肩を並べる人はなかったやうである。(略)実に時艱にして英雄を憶ふと云ふ事あるが、今日の如く士風墮落、元氣銷沈して居る時世に際して、偉大なる感化と拔群の力量を備へたる南州の如き偉人を想起するのは、決して偶然の事でないと思ふのである」⁽²¹⁾。ここに見えるのは、現状への閉塞感とそれを打破するための西郷的英雄の待望論であった。

第二は「征韓」の先駆的主唱者としての役割を評価しようとする立場である。たとえば、「韓国の併合は吾が国開闢以来の国是にして、神功皇后以来殆ど二千年間の継続事業であつたと云つても差支はない。然り而して近世最も之が為に熱血を傾け尽した西郷南州翁は、時局の解決と共に、一層深き感慨を以て追想せらるるのである。(略)何にしる翁は曠世の英雄で、私共は常に其庇蔭を蒙つて居つた」⁽²²⁾のように、この年の朝鮮併合と「征韓論」を主張したとされる西郷三十三回忌が重なった事を、感慨を持って論ずる。

第三は、同情憐憫からの再評価である。「西郷は無謀の挙を敢てせしに外あらざるも、国威は年を逐て伸張し、近く対岸の半島を併はせ、強国の実を世界に示すに及びぬ。(略)西郷の至誠を以て大詔を奉体し、之が犠牲と為りて、国威の宣布を助成せしを歎称せざるを得ず。英雄なき時代は平凡なりといひ、英雄なき国家は平凡なり

といふ。明治の日本に西郷吉之助隆盛あり。」⁽²³⁾

第四に、西郷非評価論／批判論の反論として、誤伝を糾す事を目的とした論説がある。例えば、三浦梧楼は「西郷の真価は間違つて伝へられて居る事が多い。中にも薩州人の大概は殆んど西郷を知らぬと云つてもよい位である。是れはつまり西郷を出来る丈豪らしくしやうと思つて、何もかも西郷がやったやうにして丁ふから、鼻屑の引き倒しで西郷の真価は没却して、凡骨以下に落ちてしまふ事になるのぢや」と語っている。⁽²⁴⁾

同号には、政教社が三十三回忌に併せ開催した「南州記念講演会」の顛末も掲載されており、その席上、雪嶺は「西郷南州翁の祭典及講演会は、近い原因として朝鮮合併の為に催されたと思ひますが、主たる原因は其大なる人物と云ふ所にある。(略)翁に就ては色々議論もある。(略)非難をする人もありますが、大なる人物と云ふ点に於いては、少しの疑を容れぬ」⁽²⁵⁾という発言を残している。ここからは、①折からの朝鮮併合という政治的事件が、西郷の再評価を促進した様子が看取でき、政教社はそうした気運を醸成する一翼を担っていたこと、②しかしながら、一方では三浦梧楼の主張や雪嶺の発言から、一九一〇年段階では、西郷は「国民周知の英雄」と認識されるまでには至っていなかった点が窺えるのである。

雪嶺が西郷の「復権」を果し、その再評価を行おうとする志向性を持っていた事は間違ひなからう。それは藩閥政治に対する批判をも含意していた。⁽²⁶⁾しかし、先の吉田松陰に対する論説と同様、その評価を一方的かつ偏狭な結論に誘導する事なく、多様な意見を紹介しようとするところに、その個性を看取できると考える。

一九一九年の秋季増刊号として出された「義民号」は、江戸時代の百姓一揆の指導者たちを論ずる特集であったが、こうした雪嶺の個性が反映された典型である。⁽²⁷⁾雪嶺の巻頭論文「賤民の義勇」は、「羊に喩へらるゝ人類

の群衆が、唯々諾々、牧者の指導する俛に進退し、一毫も背くなからんことを期するは、人類の力を解せざる者の事なり。或る時代まで統率者なくして群衆は全く無力、群衆の歴史は統率者の歴史なれど、漸く勢の変じ、統率者は群衆の為に特殊の事務を執る者、群衆の歴史は群衆なることは愈々明白を加ふ。(略) 世々代々、文化の進むを察すべく、之に応じて英雄が増加し、偉人が増加し、義民が増加し、(略) 智能を啓発し徳器を成就する者の次第に数を増し、幾分づ、理想の世に近づく⁽²⁸⁾と心得べし(二八頁)」と論じていた。これが、前章で紹介した「人皆天才」論(一九一五年四月号)や「ムッソリーニ的英雄」無用論にも通ずる議論であることは言うまでもない。この特集号には、自由主義的法学者・岡村司が「吾々が今日自由制度の中に棲息して居ることが出来るのは、偏に此等の人々(見城註「百姓一揆の犠牲者」)の恩恵であると言はねばならない」と述べる論説⁽²⁸⁾なども掲載されていたが、大正デモクラシー状況に見合った「群衆」の成長発展を、「義民」評価と重ね合わせて高評する姿勢は明確であつた。

さらに義民号には、「理想の世」や「自由制度」のために義民を思い起こせとする雪嶺や岡村の議論に対し、「立憲政の治下には義民存在の理由はなからう。普通選挙でも行はれ国民皆参政の権を有するに至つては、所謂義民に待つものはなからうと思ふ⁽²⁹⁾」という主張さえも掲載されている。義民の再評価をデモクラシーの進展に結び付けようとする雪嶺の意図を乗り越え、時代はもはや義民的存在を求めているという究極の議論であつた。

その一方でこの号には、国家主義的な日蓮主義論を展開していた田中智学が「世のあらゆる教育学問のすべてを開点して、『犠牲道德』で持切らせたいとおもふ。是れさへ一つ貫けば、国家も人生も世界も法界も神も仏陀も一切全く解決される。権利も道德も詮議の限りでない。普通選挙も労働問題も政治も芸術も将棋倒しに埒があ

いて了ふ。『犠牲』といふ二字の外、一切の教科書を抹殺してもよろしい。日本国体の發揮、即ち世界的發揚は、全くこの犠牲道德の消長いかに関する。政教社の催しはかへすがへすも痛快な挙だ⁽³⁰⁾」と語り、「滅私奉公」を正当化する道具として「義民」を使おうとする解釈も混在していた。

この時期の『日本及日本人』が、「雪嶺の個人指導体制」⁽³¹⁾の下で編集されたとするならば、このような多義的な見解を交えた誌面構成は、その個性の反映といってよい。この推測は、雪嶺が同誌から離れて以降の誌面構成の変容等から改めて確認できるのだが、次節はその確認に割いていきたい。

(2) 雪嶺離脱後の『日本及日本人』誌とその人物論

一九二三年九月に雪嶺は政教社を離脱する事を表明した。それ以前からの内部対立が、関東大震災を契機に顕在化したためであったとされる⁽³²⁾。そもそも『日本及日本人』誌に集った同人の中には、雪嶺の経営方針や論說の思想性に対し、批判的見解を有する者も少なくなかった。とりわけ、同誌の歌壇を担当していた三井甲之が、雪嶺離脱後の第一号（一九二四年一月号）に掲載した「三宅雪嶺の個人主義思想の錯誤を指摘して祖国主義信仰を宣言す」と題する論文は、政治的性格が極めて濃厚なものであった。まずこのタイトル自体が、「大正デモクラシー」期において、雪嶺がどのように認識され、彼に対する批判の鋒先がどこにあったのかを如実に示すものである。三井は、この論考で雪嶺が黎明会などの運動体に参加したことを徹底的に論難する。そして「三宅氏のかういふ論理的及び公共道德的弱点の基くところのものは、（略）唯理主義的個人主義、個人主義的自矜主義、打算的利己主義である。此の思想的欠陥が三宅氏をして流行偽新思想家の追隨者たらしむる資格となるのであつ

て、此の盲目偽新思想輿論の評判がその個人主義と自矜主義とを相互因果循環的に助長するのである（七二頁）」とその「似而非性」を口汚く罵った。しかし、後に箕田胸喜らと連繫する思想運動を展開した三井甲之が激しい口吻を吐けば吐くだけ、今日の我々は、逆に雪嶺が「大正デモクラシー」の積極的参与者であつた事を確認できるのである。

さて、雪嶺が去つた後も、『日本及日本人』は発行され続け、また人物特集号もしばしば企画されている。雪嶺が関わっていた時期と編集企図は変つたのであろうか。それを確認する事は、雪嶺の思想の影響力如何を知る作業にもつながる。

一九二六年一月号は、「南州号」と題し、西郷隆盛没後五十年記念号に当てられている。「三十三回忌」特集号として出された一九一〇年九月号が、「反逆者」西郷の復権を目指すとともに、評価の多元性を保証していた事は先に触れた。五十八本もの関連論稿から成る五十年記念号ではどうだったか。

『南州号』の発行は大賛成、否衷心より感謝する所である。大西郷の如き高潔なる大人格者大人物を世に紹介する資格ある雑誌は、天下無数雑誌あるも、『日本及日本人』を第一位として他数誌に過ぎぬ。（略）大西郷といふ明礬の大結晶を投ずれば濁貴濁富濁賤濁貧濁学の濁水も多少清めることが出来るであらう」と⁽³³⁾といった論考を筆頭に、現代の混迷を破る鑑として、「英雄」西郷を認識すべしという論が、同号には並んだ。中には「自分は由來人間について、好き嫌ひが太だ多い。就中その好ききなといふのは、日本では豊太閤、西洋では那勃烈、而して、吉田松陰やルッソーなどにも亦窃に私淑したことがある。然も所謂人格者として、古今独歩的に最偉大なるものは、誰よりも西郷南州翁その人であらうことは、実は近頃になつて漸く料簡が極つたので、何ともお耻ずか

「いい話である」³⁴のような批判を多少内包する如き反省の弁も載せられているが、ある意味でこの発言は西郷の「英雄」化作業が同時代的に確実に進行せしめられていき、無知を恥じざるを得ない状況にまで至った過程を伺い知るための証言ともなるう。

雪嶺が編集に関わっていた時代には、「吉田松陰号」（一九〇八年一〇月）、「南州号」（一九一〇年九月）、「世界の危局に立ちて偉人を憶ふ」（一九一八年一月号）、「余の好める及好まざる史的人物」（一二〇名の知識人アンケート特集；一九一八年四月号）、「英雄と美人」（一九一九年一月号）、「義民号」（一九一九年一〇月号）、「世界聖賢の比較」（釈迦仏と聖徳太子、基督と親鸞、王陽明と中江藤樹；一九二一年四月号）などがあつた。一九一七年九月号では「半百年生死録」と題し、明治維新五〇年を人物評価によって回顧する企画をしている。そこで雪嶺は「世間の評価は多く信ずるに足らず。時として金石が浮き木葉が沈むことあり。凡そ頭角を露はす者は、或は少数識者間に知られ、或は多数愚者の間に知られ、普通の評価は識者愚者の混合せる処に成立す（三頁）」という相対主義的視点を強調している。つまり、雪嶺の思想においては、「英雄」顕彰の意義をある程度認めつつも、自身の論考においては、最も評価しているという西郷論を含め、熱烈さとは対極の人物論を展開していたのである。

そして、雪嶺離脱後に編まれた「南州没後五〇年特集」は、人物評価の多義性はある程度残しつつも、評価に一定の方向性が看取できるのだが、それは三井甲之が「祖国主義信仰」の大義名分をもって、雪嶺を「個人主義思想」と非難した思想へとつながっていく。三井等の意向を受けて「建国号」（紀元節をより政治的なイベントにしようとする「建国祭」に連動した特集…一九二四年二月号）、「対米公憤号」（一九二四年五月号）、「大亜細

亜主義」「東大陸の人豪」(一九二四年一〇月号)などがその後編まれているが、その変貌は明らかであった。

むすびにかえて

昭和初期に鶴見祐輔や徳富蘇峰が民心を鼓舞するような「英雄待望論」を主張していたことを「はじめに」で見た。しかし、そのしばらく前、大正期において三宅雪嶺が展開していた議論は、それらとは異質なものの、突出した人傑を称揚しない「非英雄的英雄論」あるいは「人皆天才」論という形のものであったことを本稿では明らかにしてきた。

雪嶺のこうした史眼について、日露戦後(一九〇七年)に、横山源之助が以下のような雪嶺論を書いている事には注目される。「今も時勢の上に超然たる此の哲学者は、飄然として(略)人物論を続け、意の向ふ儘に褒貶の筆を下しているのも(見城註)日清戦争後は政治に近づき人物評論をしなくなった徳富蘇峰と較べると)一種の対照である。(略)殊に雪嶺に多とすべきは逆流の人に同情あることである。(略)順境の人を称して、逆流者を忘れるるのは必ずしも人物評論の全くものとも言へない。而して世の人物論者は、常に顕位の人に謳歌するの傾向がある。余は天下一己の人に謳歌し賛美せる時、他の同功者を尋ねて、世人の注意を喚起せる雪嶺の冷静と、その眼識を多とする者だ」⁽³⁵⁾。

三宅雪嶺が長期にわたる執筆活動の一つの柱としていた「人物論」については、これまでそれほど注視されてこなかった。たとえば、大正期も含めた「史論家」雪嶺を論じた佐藤能丸は、「(雪嶺の)主たる活躍期は一八九〇年前後より一九二〇年前後までで、これ以後とりわけ歴史家としての面が強くなり、まとまった史論を書き始

めている」としながらも、「政論家としての雪嶺は、既に大正期半ば頃には、言論界の老宿として多大の尊敬を払われてはいても、新しき政論家として青年をリードする存在ではなく、その反面、処世訓や人生訓がもてはやされるようになってきていた」⁽³⁶⁾と両者を分離した上、低い評価にとどめている。

さらにこうした評価と同様な視点から、大正期の『日本及日本人』について、有山輝雄が「周囲の状況の変化に超然として自らの主義主張を維持することに独自の価値が見出されることになった。しかし、この『超然主義』によって、商業化の大波のなかでも明治以来の政論ジャーナリズムの伝統を守ることはできたが、反面社会全体の「民衆化傾向」に眼をふさぎ、政論内容の保守主義を生み出すことになった。そして、それは結局大正末期における「日本及日本人」の行きづまりを招くことになったのである」⁽³⁷⁾と評価するのは、ある一面については誤りではないが、かと言って正鵠を突く指摘でもない。

『日本及日本人』誌上における諸評論は、「大正デモクラシー状況」に積極的に竿を差す意図を持つ雪嶺のような議論と田中智学のような偏狭な国体論が併存するものであった。そして、それは編集者・雪嶺自身の思想方針の開示であり、「理想の世に近づく」ための方法論であつたろう。その意味で、大正期における雪嶺の評論を再評価する価値は十二分にあると考える。しかしながら、その一方で、多義的人物論の発表を保障し、相反する要素をはらんだ複数の評価軸を時代の中に埋め込んでいったのも事実である。そして、その事は、雪嶺の離脱後に、『日本及日本人』が今日的意味における偏狭な「国粹主義」の機関誌に墮していく結果を招来したであろうし、国体論的人物評価も固定化していったであろう。雪嶺はある意味で、歴史上にかくの如き思想をもたらした両義的役割を産婆のように果たしたのである。

なお、雪嶺自身の興味そして女婿中野正剛の関心から言えば、「アジア」観、「東洋」論と「英雄」の議論も合わせて論ずる必要は感じているが、本稿では果せなかった。今後の課題としたい。

注

(1) 大日本雄弁会講談社発行。鶴見は、鉄道院勤務時代に後藤新平の薫陶を受け（のち女婿ともなる）、政界入りを目指す。初挑戦では落選したが、この著作を発刊した一九二八年に衆院初当選を果たしている。国際関係が緊迫化してくるこの時期に、第二の維新を起すべき「天才」、「英雄」を求め叫ぶ鶴見の議論は、本人の意図は別にして、「国難」を切り開いていける人物を求め、ひいては青年将校や革新官僚の台頭を結果的に支えていくであろう。

なお、鶴見は敗戦後、公職追放されるが、解除後の一九五一年『新英雄待望論』を再度発行し、戦後民主主義、国際平和主義に合致する形で論説を、あらためて展開する。

(2) 雄山閣編輯局編『英雄偉人の検討』、雄山閣、一九三三年、二頁。

(3) 坂本「『英雄』の時代とその終焉」一九八五年、のち坂本『近代日本精神史論』、講談社学術文庫、一九九六年所収。

(4) 戦前千葉県「三大偉人」とされた幕末の農政家・大原幽学は、千葉県教育会などが周知浸透を試みるものの、その社会的認知度は低いままであり、一九三〇年代初頭に展開した「神社創建運動」も挫折していく（見城「近代日本社会における大原幽学の〈発見〉」『歴史科学と教育』一八号、一九九九年）。また〈義民〉の代表とされる佐倉惣五郎は、近代日本で両義的性格を付与され、その恣意的評価の中で翻弄されていく（見城「近代日本における〈義民〉観の相剋」『日本思想史研究会会報』一八号、二〇〇一年）。なお、筆者の問題意識を論述したものに、見城「『日本史』という安堵と陥穽」（方法論懇話会編『日本史の脱領域』森話社、二〇〇三年）がある。

(5) 野崎義幸「『英雄』をめぐるメディアと若者たち——一九一〇～二〇年代の神奈川県を中心として」『人民の歴史学』

一五四号、二〇〇三年。

(6) 代表的研究に、中野目徹『政教社の研究』思文閣出版、一九九三年、佐藤能丸『明治ナショナリズムの研究』政教社の成立とその周辺』芙蓉書房出版、一九九八年、がある。

(7) 長妻三佐雄『公共性のエートス——三宅雪嶺と在野精神の近代』世界思想社、二〇〇二年。長妻「三宅雪嶺の英雄論」『日本歴史』三三六号、二〇〇三年。

(8) 雪嶺の言論活動はきわめて長期にわたったが、明治後期以降に關説している研究は必ずしも多くない。たとえば、雪嶺が幸徳秋水『基督抹殺論』の序を執筆したり、一九一二年に行われた「ルソー誕生二百年記念式」の事実上の発起人であった事（『革命經典作家誕生二百年』『日本及日本人』一九一二年六月号）を、大正デモクラシーの思潮において捉えようとした松尾尊允の論考（『明治末期のルソー』一九六二年、松尾『大正デモクラシーの研究』一九六六年）や雪嶺の執筆した論文「浩然と自由」（『日本及日本人』一九一九年四月号）などを分析し、大正期における雪嶺の「自由」論を独自のものとして再評価しようとする梶田明宏の論考（梶田「三宅雪嶺の『浩然と自由』」『メディア史研究』第一号、一九九四年）等があるが、いまだしの感が強い。

(9) 岩井忠熊「日本近代史学の形成」『岩波講座日本歴史』別巻一、一九六三年。

(10) 史学会編『史学会雑誌』一〇号、一八九〇年。

(11) 白鳥「歴史と人傑」『史学会雑誌』三号、一八九〇年。

(12) 黒田俊雄「『国史』と歴史学」『思想』七二六、一九八四年。

(13) 『基督教新聞』第二〇四号、一八九三年。

(14) 三宅『真善美日本人』（『明治文学全集』33 三宅雪嶺集）筑摩書房、一九六七年、二〇六頁。）

(15) 三宅「人皆天才」『日本及日本人』一九一五年四月号。

(16) 「最下から最上へ」『日本及日本人』一九二二年一〇月号。

(17) 「左傾右傾の險悪分子」『我觀』第四号、一九二四年一月号。

(18) 『偉人論及偉人研究』偉人伝全集第二四卷、改造社、一九三五年。

(19) 「国粹主義」を掲げた政教社が一八八八年四月に創刊したのが、雑誌『日本人』である。同誌は政府批判の廉により三度にわたる発行停止を受けたものの、断続的に継続された。そして一九〇七年に死した陸羯南の遺志を継ぐという目的で、同年から誌名を『日本及日本人』に変更した。

同誌の編集体制については、雪嶺自身が「社員は十数名でも、後に志賀重昂氏と自分が担任し、更に自分が担任するを余儀なくされた。自分が担任するとして、社説を口授するか、感想を筆録するのみで、経営を事務員任せにし、色々経営が変わった」と回顧している（雪嶺「自分を語る」一九二四年六月・『人間の記録』43 三宅雪嶺一九九七年）。また現在の研究者による時期区分は、編集体制を四期に分け、第一期「一八八八～一九三三年」「同人」による共同編集体制期、第二期「一八九三～一九五五年」三宅雪嶺・志賀重昂の二頭指導体制期、第三期「一八九五～一九二三年」三宅雪嶺の個人指導体制期、第四期「一九二四年～」ポスト雪嶺期と整理する（芳賀登「『日本人』の解説」…復刻『日本人』第三四巻、日本図書センター、一九八四年）。

(20) 雪嶺「二十一回猛士五十年祭」『日本及日本人』一九〇八年一〇月号、一〇頁、八・九頁。

(21) 杉浦重剛「天下の大兵を支へし力量」『日本及日本人』一九一〇年九月号、七六・七八頁。

(22) 黒田清綱「南州翁は曠世の英雄」（同右）、七二頁。板垣退助「西郷南州と予との関係」や林董「征韓論と朝鮮併合」など、類似の論考も採録されている。

(23) 特集号巻頭論文、無署名「国威宣布の犠牲西郷南州翁」（同右）、九頁。

(24) 三浦梧楼「西郷の真価」（同右）、五二頁。

(25) 雪嶺「偉人大西郷」（同右）、一四五頁

(26) 前掲、長妻「三宅雪嶺の英雄論」を参照のこと。

(27) この点については、見城「近代日本における〈義民〉観の相剋」（『日本思想史研究会会報』一八号、二〇〇一年）で、検討を行った。

- (28) 岡村司「自由の犠牲者を懷ふ」『日本及日本人』一九一九年秋季増刊号(義民号)、四七頁。
- (29) 沢柳政太郎「旧義民と新義民」(同右)、四八頁。
- (30) 田中智学「犠牲任侠の壮拳」(同右)、六四頁。
- (31) 註(19)を参照。
- (32) 直接の発端は、雪嶺夫人の花圃が編集する新雑誌『女性日本人』が、雪嶺の強い希望で一九二〇年九月に創刊されたあたりに遡る。これが同社の経営不振に一層拍車をかけたため、雪嶺は女婿の中野正剛にだけ相談し、秘密裏に一九二三年九月から『日本及日本人』を別個の雑誌に切り替えることを決めていた。しかし、折からの関東大震災で政教社自身が炎上する不幸に見舞われた事、さらに再建計画について同人からの強い反発を受けた事から、その目論見は挫折せざるを得なかった。その窮地を挽回するために、雪嶺は『日本及日本人』を離脱し、中野と新雑誌『我觀』を創刊する(第一号は一九二三年一〇月一五日発行)。よって、註(19)に挙げた芳賀論文は、一九二四年以降を「ポスト雪嶺期」とする。
- (33) 田中舎身(弘之)「現代人は大西郷の罪人也」『日本及日本人』一九二六年一月号、一九四頁。
- (34) 谷本富「嗚呼大人格者南州翁」(同右)、四一〜四二頁。
- (35) 樹下石上人「横山源之助」人物評家の変遷『文章世界』二卷十三号(一九〇七年十一月)、『明治文学全集92卷明治人物論集』、筑摩書房、所収)。
- (36) 佐藤能丸「三宅雪嶺」(鹿野政直他編『日本の歴史家』、日本評論社、一九七六年所収)、五三・五五頁。
- (37) 有本輝雄「雑誌『日本人』・『日本及日本人』目次総覧」日本近代史研究会、一九七七年、三三頁。

〔付記〕本稿は、二〇〇一年八月の東北大学「日本思想史研究会」夏季セミナーと二〇〇二年三月の立命館大学「近代日本社会と天皇制研究会」で報告した内容が原型となっている(前者をめぐる討論要旨は『年報日本思想史』創刊号、二〇〇二年に収められている)。近年、長妻三佐雄氏、野崎義幸氏の刺激的な論考が発表されたのを承け、若干の構

成替え、修正を加え、拙論を公にすることを決意したことを記しておく。

大正期における「英雄論」と三宅雪嶺